

強者の戦略

東大日本史のみかた 38 [解答編]

こんにちは。日本史の岡上です。さて、今回は承久の乱以降の朝廷と幕府の関係を問う問題でした。出題のテーマは一般的で、知識のある人であれば、さらさらと解答が書けてしまうような出題であったと思います。しかし、そこが今回の出題の落とし穴でもあって、与えられた資料文、そして設問の条件をどこまで深く汲み取ることができるかで、解答の質が変わってしまうような出題であったと思います。

それでは解説を始めていきましょう。

<承久の乱とその影響>

設問

A 後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件について、その事件がその後の朝廷と幕府の関係に与えた影響にもふれつつ、2行以内で説明しなさい。

問われているのは「後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件について」。条件としては「その事件がその後の朝廷と幕府の関係に与えた影響にもふれつつ」とあります。

後鳥羽上皇が流される原因となった事件は1221年の承久の乱ですが、「承久の乱」と書いただけでは説明したことにはなりませんので、内容について言及する必要があります。とはいえ、2行(=60字)でまとめる必要がありますので、要点だけ書くことができればよかったですと思います。

承久の乱(1221年)

- ・後鳥羽上皇が北条義時追討の兵を挙げる
- ・結果は幕府の勝利

では次に「その事件がその後の朝廷と幕府の関係に与えた影響」についてみていきましょう。承久の乱後の処理に関しては、教科書内容の知識としていくつも思い浮かんだと思います。

- ・後鳥羽上皇を隠岐に、土御門上皇を土佐(のちに阿波)に、順徳上皇を佐渡に配流した
- ・仲恭天皇を廃し、後堀河天皇を擁立した
- ・京都に六波羅探題を設置して、朝廷の監視、京都内外の警備、西国の統轄にあたらせた
- ・上皇方についた貴族・武士の所領を没収し、新たに地頭を補任した
- ・乱後、幕府は皇位継承に介入するなど朝廷に対しての優位を確立した

強者の戦略

もちろんこれらをすべて解答として書くことはできませんので、取捨選択が必要になります。では何を選択して書くべきか。ここはやはり与えられている資料文との関連を考えたいところです。

(1) 1235年、隠岐に流されていた後鳥羽上皇の帰京を望む声が朝廷で高まったことをうけ、当時の朝廷を主導していた九条道家は鎌倉幕府に後鳥羽上皇の帰京を提案したが、幕府は拒否した。

資料文(1)では、後鳥羽上皇の帰京を幕府が拒否したというエピソードが紹介されています。これを念頭におけば、承久の乱後、幕府が朝廷の政治に介入し、優位に立っていたことを解答に反映させればよいことが分かります。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

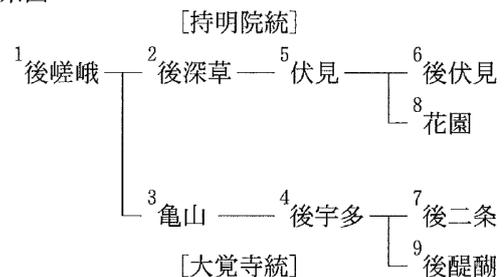
A後鳥羽上皇は北条義時追討の兵を挙げたが、幕府に敗れた。その後、幕府は朝廷の政治に介入するなど朝廷に対して優位に立った。(60字)

<持明院統と大覚寺統>

設問

B 持明院統と大覚寺統の双方から鎌倉に使者が派遣されたのはなぜか。次の系図を参考に、朝廷の側の事情、およびAの事件以後の朝廷と幕府の関係に留意して、3行以内で述べなさい。

系図



* 数字は天皇に即位した順

問われているのは「持明院統と大覚寺統の双方から鎌倉に使者が派遣されたのはなぜか」。条件として「系図を参考」にすること、「朝廷の側の事情、およびAの事件以後の朝廷と幕府の関係に留意」することが求められています。

設問Aは書きやすかったと思いますが、設問Bはどこから手をつければいいのか、少し迷ってしまいますね。まずは資料文を確認しながら、解決の糸口を探っていきましょう。

(2) 後嵯峨上皇は、後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかった。そのため、後嵯峨上皇の没後、天皇家は持明院統と大覚寺統に分かれた。

資料文(2)では天皇家が持明院統と大覚寺統に分かれた理由として、後嵯峨上皇が後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかったことによると説明しています。

強者の戦略

(3) 持明院統と大覚寺統からはしばしば鎌倉に使者が派遣され、その様子は「競馬のごとし」と言われた。

資料文(3)では、持明院統と大覚寺統が競って鎌倉に使者を派遣するエピソードが紹介され、ここから持明院統と大覚寺統のいずれが院政を行うかで対立していたことが読み取れます。また「鎌倉に使者が派遣され」ということから、両統のうちいずれが院政を行うかの決定には、幕府が深く関与していたことも読み取れます。

では朝廷が院政の主導者(=治天の君)を決められなくなったのは何故でしょうか。ここで条件の「Aの事件(=承久の乱)以後の朝廷と幕府の関係に留意」を考えてみましょう。

設問Aでも確認したように承久の乱後、幕府は3上皇を配流し、新たな天皇を擁立するなど、朝廷の政治(治天の君の決定など)に深く関与するようになりました。

つまり、承久の乱後の朝廷は自らの意思で政治を決定することができなくなったため、後嵯峨上皇もまた後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかった、というより決められなかったのではないかと考えることができます。

このような朝幕間の関係のなかで、**持明院統と大覚寺統が競って鎌倉に使者を派遣したのは、幕府の意向を取り付け、皇位継承を有利に進めるためであった**ことが分かります。

ここまでで解答を書くことができそうですが、「系図を参考」にするという設問の条件も満たす必要があります。では、系図からは何が読み取れるでしょうか。

系図は持明院統と大覚寺統の皇位継承の順序を表しています。知識がある人は「両統迭立」という用語でまとめたくなくなってしまいますが、ここは注意。よく見ると、亀山-後宇多、伏見-後伏見といった

ように両統が交互に皇位に就いているのではなく、ある統が2代続いて皇位に就いていることもあります。ここから、**持明院統と大覚寺統の両統迭立は定まったものではなく、だからこそ両統は競って鎌倉(幕府)との関係を求め、幕府もまた両統いずれに偏ることなく、その時々で裁定をしていた**ことがうかがえます。

以上をまとめて、解答を作成しましょう。

【解答例】

B承久の乱後、幕府は朝廷政治への関与を深め、持明院統と大覚寺統の皇統の対立においても、その時々で裁定を行った。そのため両統は皇位継承を有利に進めるため、競って幕府に使者を派遣した。(90字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！